HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代社会における大人への移行の諸問題
Author(s)	白井, 利明
Description	特集II　シンポジウム
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 103, 191-206
Issue Date	2007-12-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.103.191
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30344
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_191-206.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第 103 号　2007 年 12 月

現代社会における大人への移行の諸問題

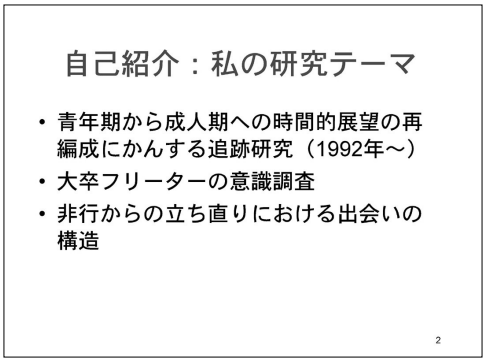
白　井　利　明*

Some Issues of the Transition to Adulthood in the Contemporary Society

Toshiaki SHIRAI

ただ今紹介にあずかりました白井と申します。本日はこのような場に迎えていただきまして、本当にありがとうございます。心理学サイドで言いますと、教育学の方の集まりのところに来るということはあまりありませんで、むしろ大変勉強になっております。先ほど、正統的な青年心理学者というふうに紹介していただいたんですけども、主として青年期の時間的展望というものに対して調査研究の方でアプローチしております。

最近、こうしたフリーター、ニートという問題が脚光を浴びていまして、必ずしも専門ではないんですけども、青年心理学のサイドから何か発言できないかなと思って最近勉強しておりますので、今日の発表者の方の刺激を受けながら、少し考えていることを途中経過のような形でまとめたものをお話しして、何かお役に立てばというふうに思っております。



自己紹介に代えてということで、少し私の研究を関連するかなと思うものを紹介してみたいと思うんですけども、まず私が一番中心にやっておりますのは、この一番上のものでして、青年期から成人期への時間的展望の再編成にかんする追跡研究というものをやっております。これはもう 15 年ぐらいやっておりまして、1992 年にドイツとベルギーの方に在外研究で行って、ヨーロッパの発達心理学の息吹をこの身で感じてきたんですけども、そのときに、発達研究というものは実際、縦断研究していかなくちゃいけないんだ。そんなことを感じまして、１人で始めました。

これは大学生を対象にしまして、20 代を 10 年間の間に追跡をしているわけなんですけども、だいたい 40 人ぐらいの人を 10 年間の間に 4 回、面接調査をいたします。それから毎年、質

* 大阪教育大学教授

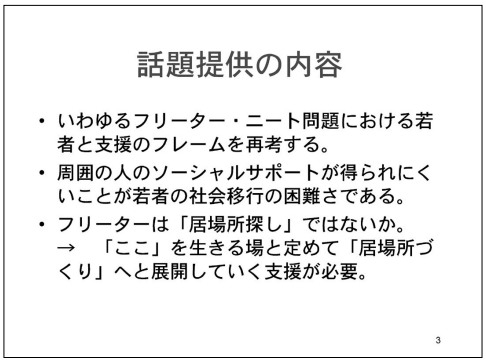
問紙を調査しておりまして、330 人ぐらい現在のところプールしております。それを 1 人でやっているということで、かなり 1 人でやるには限界のある研究なんですけども、その中で時間的展望、つまり将来のことをどう大人になっていく過程で考えているのか。そして自分の過去をどう再編成しながら、自分の将来というものを打ち立てていくのか。そういうものを面接と調査によって明らかにしようという試みをしております。

それから 2 つ目の大卒フリーターの意識調査なんですが、これは科研をいただきまして、去年から 3 年間で、調査をするということで、去年は大阪にあるジョブカフェの聞き取り調査をアドバイザーの人から行いました。今は、質問紙調査を予定しております。

それから 3 つ目なんですけども、非行からの立ち直りにおける出会いの構造という研究をしております。これは少年鑑別所あるいは家庭裁判所、児童相談所等の実務家の人たちと一緒に研究しているわけなんですけども、どんなふうに立ち直っていくのかを見ようとしています。立ち直っていく際の仮説がありまして、それは出会いの構造モデルというものを考えております。

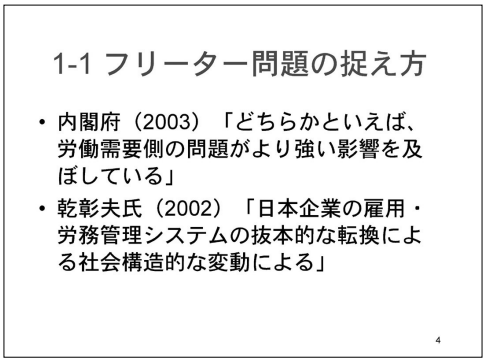
出会いの構造モデルといいますのは、少年たちが立ち直っていく上で人との出会いが大事であると考えます。出会いが大事なんですけども、いろいろな人と出会っているはずなのに実はそれが出会いにならないという問題もあります。少年の側のタイミングというんでしょうか、どんな人とどんなタイミングで出会っていくのか。こういうことが大事だろうということで、出会いモデルというものをつくりまして研究をしております。

これももともとアメリカのサンプソンとラウプという社会学の人がおりまして、この方はグリュック夫妻という方の縦断研究を引き継いで、70 歳までずっと追跡した研究というものがあります。この方が以前行った研究によりますと、少年の立ち直りに最も重要であったものは雇用の継続であるとされています。その次に、もし結婚しているのであれば、結婚が長続きしているかどうかは重要であると。それ以外の心理学的な変数というものは重要でなかったのが結論なんですけども、私は心理学者ですので、そうじゃないだろうと思うのです。こうした社会的な問題、社会的な繋留といった問題の中に実は心理学的な問題、そういうものが交ざっているんじゃないか。そんなふうに考えて現在研究をしております。今日のお話も、今言ったようなことが 1 つ土台となって少し考えてみたということで、皆様方の何か刺激になればと思っております。



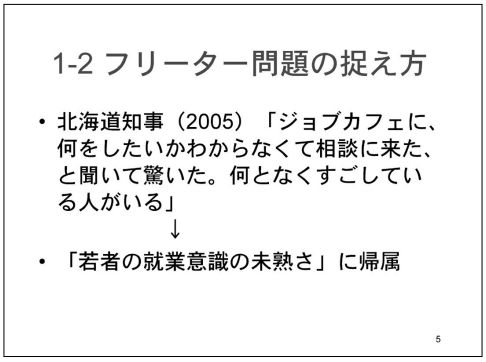
今日の話題提供の内容なんですけども、いわゆるフリーター・ニート問題における若者と支援のフレームを再考してみたいということです。そして周囲の人のソーシャルサポートが得られにくいことが若者の社会移行の困難さではないかというふうに言いたいと思います。

そしてフリーター離転職というものは、一言で青年期のアイデンティティの探求という観点から言いますと、居場所探しではないかなと、そんな視点を提案してみたいと思います。そしてその場合に、単に探し回るということではなくて、今ここを生きる場と定めて、そして居場所をつくっていく。そんなふうに展開していくことの支援というものが大事ではないかなということをお話ししてみたいと思います。

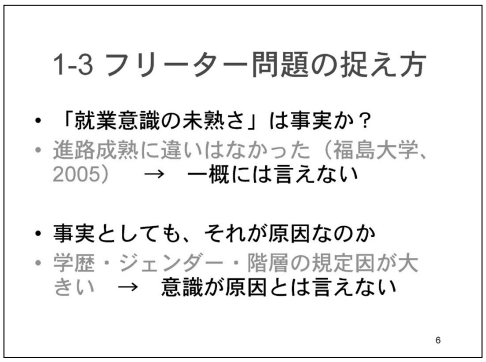


まず、すでに北海道大学の先生方からお話しになったことと重複するわけなんですが、フリーター問題の捉え方というところから話を始めてみたいと思います。政府の見方によりますと、労働需要側、つまり企業の側に問題があるのか、それとも若者の方に問題があるのか、どちらにあるのかと、そういう問題を立てまして、政府の方は、労働需要側の問題がより大きいというふうにまず基本的に捉えています。

これについては今日お集まりの皆様方もそうだと思いますし、それから乾彰夫さんによると、日本企業の雇用、労務管理システムの抜本的な転換による社会構造的な変動によるというふうに考えられていまして、やはり社会全体の問題であろうというふうに考えられます。ところが、実際にはさまざまなところで若者の意識の問題へと帰結するような発言が後を絶ちません。

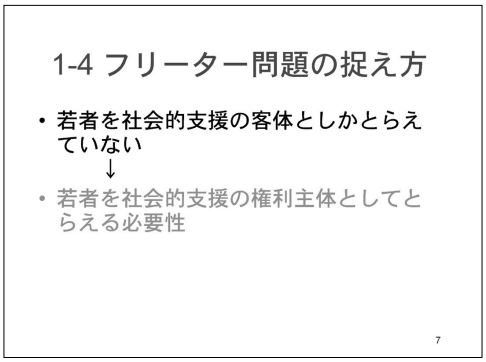


これは北海道の知事の方の発言を引いてきたんですけども、ジョブカフェに何をしたいか分からなくて相談に来た、と聞いて驚いた。何となく過ごしている人がいることを考えなくてはいけないと。結局、若者の意識が問題じゃないかというふうに非難されるような状況というものがあると思います。若者の就業意識の未熟さといったものに問題が収斂していくような傾向というものが世の中にあるように思います。

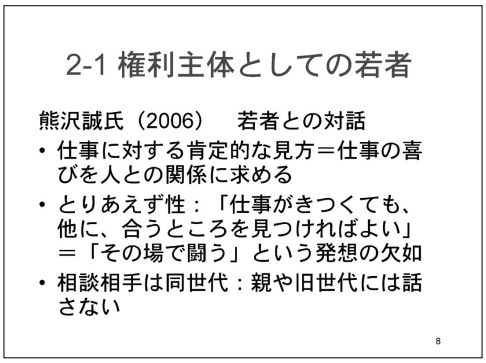


さて、そこで若者の就業意識の未熟さといわれるものが本当なんだろうか、それは事実なんだろうかということをまず検討することも必要じゃないかなと思います。福島大学の五十嵐さん、この方は心理学者なんですけども、その方が福島県の青年に対して若者に対する調査をしました。進路成熟という尺度を使って調査したものです。この進路尺度の調査は、日本の進路成熟の研究を蓄積している方のつくった尺度で、信頼が置けるものだと思うんですけども、それでは正社員の人と非正規の人との間には差がなかった。そういう結果が得られています。ですから、就業意識の未熟かどうかということについては一概には言えない。あるいは違いはないとも言えるわけなんですけども、少なくとも一概には言えない、そういう結果になっていると思います。

それから２つ目は、たとえそれが事実だとしても、それでは若者の意識の問題に還元されるのかという問題を考えてみましても、当然のことながら分かっていることであるんですけども、学歴・ジェンダー・階層の規定要因が非常に大きいわけですから、意識が原因とは言えないというふうになるかと思います。



さて、これをもう一歩違う角度から考えてみますと、こうした意識に違いがあるかどうかとか、若者の意識に非難が集まるわけなんですけども、問題は若者を社会支援の客体としてとらえているところにあると思います。若者自身が困難を乗り越えていくためにどんな支援があるべきかということを考えてみると、むしろ社会的支援の担い手である、あるいは主体である。そういったことから考え方を出発した支援の組み立てというものが必要になるんじゃないかなと思われます。



こうした若者自身が状況を変えていく主体でなければならないというふうに考えてみますと、労働社会学の分野で熊沢さんの意見というものがとても光っているように思います。この熊沢さんの本の中で、９人の若い人と対話をしたというところがありまして、とても印象的な個所があります。その９人の若者と語って３つのことに気が付いたということを指摘されておられます。

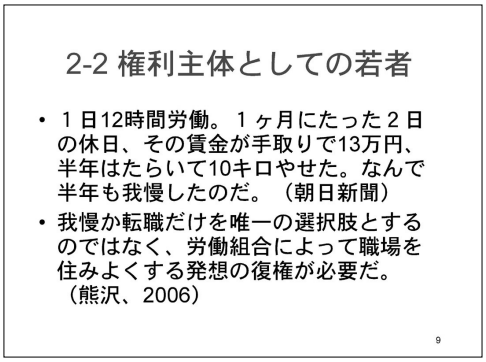
１つは、仕事に対する肯定的な見方があった。とてもやりがいがあるとか、そういう意見が非常に多かった。しかもその中身として、仕事の喜びを人との関係に求める。そういうことが大変多く述べられたという個所があります。ここからも、必ずしも若者の勤労意欲が低いわけではなくて、予想以上に高いということが得られた。しかも、人との関係に求めるというところが大変印象的でした。

しかしながら、同時にそのことから熊沢さんは危惧を持つわけなんですけども、その危惧を一言で言えば、「とりあえず性」というふうに名付けておられます。「仕事がきつくても、他に、合うところを見つければよい」といったような考え方、つまり雇用形態であるとか、あるいは労使関係といったものに対する関心のなさ、あるいはそういうもののコンセプトの欠如、そういうものが指摘されております。その場で闘うという発想がない。

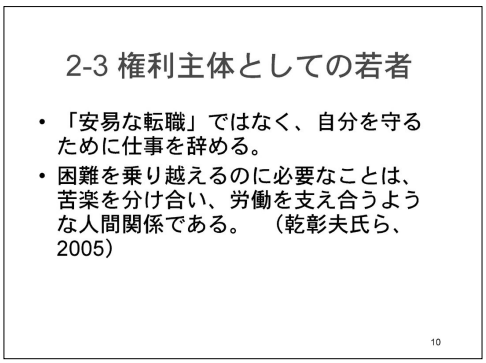
どうしてこういった発想がないかというと、若者たちが生育歴の中で教育であるとか、あるいは育ての中でそうしたコンセプトと出会うチャンスがなかった、遠ざけられてきたということはもちろんあるんだけれども、しかしそうした情報を手に入れようとすれば手に入るわけですから、従って必ずしもそういった情報に教えられてこなかったということが原因ではなくて、むしろ生活者として自分で経済的な独立をしていく、そういうことの弱さというものがあるんだと言っておられます。

そして３つ目に、相談相手は同世代で、親や旧世代には話をしない。そういったことも浮き彫りになったというふうに書いておられます。ここで若者を支援する、あるいは若者を考

える上で重要なことは、若者が支援の担い手になっていく、あるいは状況を変えていく。そうしたきっかけというものがいったいどこにあるのか。これを労使関係の中で見ておられるわけなんですけども、これは大変重要な指摘ではないかなと思います。

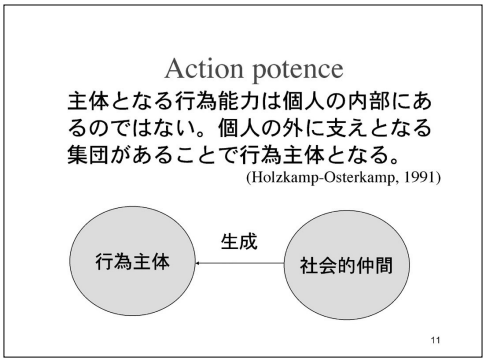


さて、この熊沢さんが本の中で紹介している朝日新聞の記事なんですけども、こんなふうに書いています。「1日12時間労働、1ヶ月にたった2日の休日、その賃金が手取りで13万円、半年働いて10キロやせた。なんで半年も我慢したのだ」というようなことを引用されております。世間では我慢が足りないというふうにいわれている若者なんですけども、どうして逆に、我慢し過ぎじゃないか。そんなことを朝日新聞の中で指摘されているものを引用しまして、次のように言っておられます。「我慢か転職だけを唯一の選択肢とするのではなく、労働組合によって職場を住みよくする発想の復権が必要だ」というふうに述べておられます。こんなふうに今の場を我慢するのか、それともそっと辞めていくのか、どちらかではなくて、どう変えていくのか。そういう発想が必要ではないかということを言っておられます。



こんなふうに若者主体として考えていくということは大変重要なことだと思うんですけども、少し違った角度から考えてみたいと思います。今度は乾彰夫さんの言っておられることなんですけども、こうした若い人たちが辞めていくことは「安易な転職」というふうに見る向きもあるけれども、そうではなくてむしろ自分を守るために仕事を辞めるんだ、ぎりぎりのところで辞めているんだと。そういうことを見る必要があるというふうに言っておられます。

そして、じゃあ何が必要なのかということでは、困難を乗り越えるのに必要なことは、苦楽を分け合い、労働を支え合うような人間関係であるというふうに言っておられます。そして特に地元つながりというものを重視されています。高校生のときから、あるいは幼いときから一緒に遊んできた地元の仲間たち、そうした仲間たちが１つの社会的な資源となっていく。そういう関係も重視されているんじゃないかなと思います。

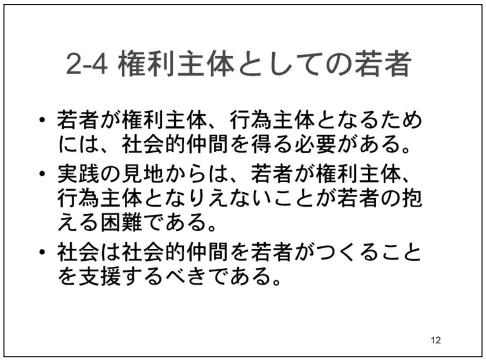


さて、ここで心理学の１つの概念を提案したいと思うんですけども、Action potenceという言葉です。これはドイツ語のHandlungsfäigkeitという言葉を英語に訳したもので、ドイツ語を直訳すると行為能力というふうに訳すことができます。主体となる行為能力は個人の内部にあるのではない。個人の外に支えとなる集団があることで行為主体になっていく。そんなふうに何か能力といいますと個人の内部にあるような、個人化された、あるいは脱社会化された、そんなイメージがあるかと思うんですけども、必ずしもそうではないということをここでは言っているんだと思います。

その集団のことを社会的仲間というふうにここでは呼ぶことにしまして、社会的仲間というものが存在することによって自分の行為の主体となっていく。自分の行動に責任を持っていく。そういう主体となっていくというものです。これを提案したのは、ドイツのベルリンにいるOsterkampという人なんですけども、Osterkampはベルリンでレイシズムの研究をしている心理学者です。レイシズムといいますのは、外国人労働者に対する差別、偏見のことで、そうものをどうなくしていくのか、そういう研究です。

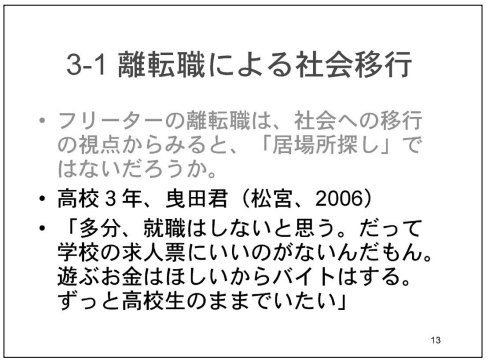
Osterkampは、ベルリンにいるソーシャルワーカーと共同研究をしていまして、そうしたソーシャルワーカーが外国人労働者の支援に回るときの、ソーシャルワーカー側の困難さというものを実践的に考えていこうというものです。ソーシャルワーカー側の困難さというのは何かといいますと、外国人労働者が非常に困っているわけなんですが、ところがソーシャルワーカーはそうした外国人労働者に対する支援を行うわけなんですけども、しかしなかなか支援する側に立つことができない。外国人労働者が困っているのは自業自得というんでしょうか、結局自分たちの何らかの行動の問題というのがあって、それによって困っているんだという見方をしてしまう。それをソーシャルワーカーの見方を変えることによって、外国人労働者の支援というものを進めていく。それはいったいいかなる心理学的な概念装置を使ったら研究ができるのか。そんな研究をしている中で、Action potenceという言葉を出してきました。

ちょっと横道にそれますが、OsterkampのパートナーはHolzkanpといいまして、Holzkanpはホルクハイマーだとかハーバーマスの強い影響を受けまして、自らの心理学をKritishe Theorieに対してKritishe Psychologieという批判心理学というものをつくっております。



さて、もう一度まとめてみますと、若者が権利主体、あるいは心理学で言えば行為主体というふうになるわけなんですけども、そういった行為主体となっていくためには社会的仲間というものを得る必要がある。そして実践というものを考えてみますと、若者がそうした主体となりえていない。そういうことが若者の抱える困難ではないかというふうに、逆に問題を立てることもできると思います。

そういうふうに考えてみますと、若者がどうやって社会的仲間をつくっていくことができるのか。社会的仲間をつくることによって主体となりえていくわけですから、そういう意味では主体となるということを支援するということは、社会的仲間をつくっていくことの支援ということになると思いますし、できれば若者自身がどうやって社会的仲間をつくっていけるようになるのか。そういうことを支援していくということ、そういう問題設定もできるんじゃないかなと思います。

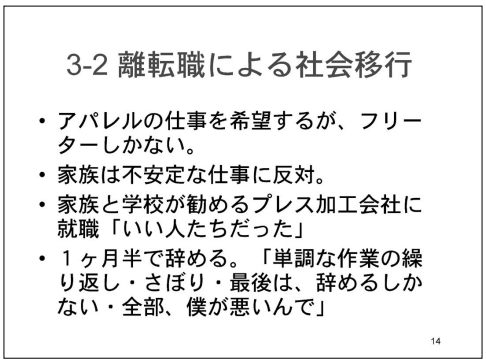


さて、ここからの話は、フリーターの離転職は、社会への移行、大人へのなり方、そういう視点から考えてみますと、居場所探しではないだろうかということを話をしてみたいと思います。ここで言う居場所探しが含意として前提となるのは、よくフリーターは自分探しだということを言われるわけなんですけども、自分探しではなくて居場所探しじゃないかなと

いうふうに考えてみたいと思うわけです。

アメリカの研究を見ましても、18歳から25歳は大人でもない、子どもでもない、青年でもない。そういう新しい段階だという議論が盛んに行われていまして、emerging adulthoodというふうに言われているわけなんですけども、Arnettというその人がemerging adulthoodという概念を提出しています。こうした大人への移行期は、新しい可能性を持つんだというふうに非常に楽観的に話をされているわけなんですけども、そのこととそれがアイデンティティの達成というものと関連するということが議論されているわけなんです。日本でも考えてみますと、そういう自分探しではなくて居場所探しではないかなというふうに考えてみたいと思います。

ここでＮＨＫの松宮ディレクターの本の中から１つ事例を紹介しながら考えてみたいと思います。高校３年生の男子なんですけども、卒業する直前にこんなことを言っていたそうです。「多分、就職はしないと思う。だって、学校の求人票にいいものがないんだもん。遊ぶお金がほしいからバイトはする。ずっと高校生のままでいたい」。そんなふうに言っています。この言葉を単純に例えますと、高校生のままでいたいということですから、大人になりたくない。そういう若者が増えているのかなとか、あるいは非常に就業意識が未熟、就業意欲が低い。そういったことを感じられる言葉かもしれません。

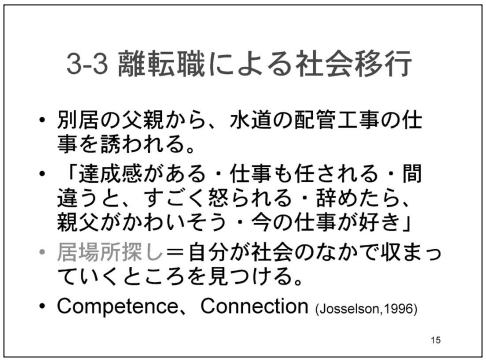


そして彼はアパレルの仕事を希望するわけですけども、しかしその仕事にはフリーターの道しかありません。家族は不安定な仕事に反対します。学校と家族が勧めたのはプレス加工会社でした。そこで最終的にその加工会社に就職するわけですけども、彼は辞めた後で「いい人たちだった」というふうには言っています。しかし、１ヶ月半で辞めてしまいます。単調な作業の繰り返しだった。それでさぼるようになってしまった。最後は、辞めるしかなかった。「全部僕が悪いんで」というふうに話をしています。

ここで１つ注目したいのは、途中でさぼっていきまして、最後は、辞めるしかなかったというところです。結局本人の欠勤であるとか、さぼっている、そういう本人の行動のまずさというものとして現れてきまして、そして辞めていく。これは自発的な離職ということになるかと思うんですけども、そんなふうに個人の、誰が見てもちょっと怠けじゃないかとか、そんな形として現れてしまう。

それともう１つは、「全部僕が悪いんで」というふうに、自分が悪いと考えている。こうした言葉に注目しておきたいなと思います。決して職場を責めたりしない。問題というもの

が個人の行動の括弧付きの「まずさ」かもしれませんけども、「まずさ」として現れてくる。そして自分が悪かったというふうにとらえている。こういったパターンというのは、必ずしもこの青年だけではないような気がします。



彼はどうなったかといいますと、別居の父親から、水道の配管工事の仕事を誘われます。そして現在、二十歳なんですけども、「達成感がある。仕事も任される。間違うと、すごく怒られる。辞めたら、親父がかわいそう。今の仕事が好き」ということを言っています。こうした一連のものを見ますと、居場所探しかなというふうに思います。居場所探しというのは、自ら居場所を欲しいと思って、それを探しているというよりかは、１つの結果論として考えてみると、彼にとっての離転職というものは、彼にとっての居場所というものを探していたのかなと、こういう解釈も成り立つんじゃないかなということなんです。そして、この場合の居場所探しというのは、自分が社会の中で収まっていくところを見つけるというものです。

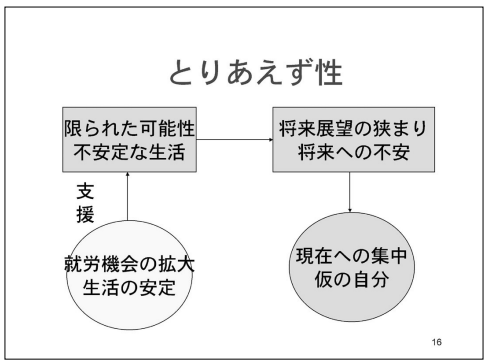
「収まる」という言葉なんですけども、これは先ほど紹介しました、非行からの立ち直りという研究をしているということをお話ししますと必ず質問されることがあります。「立ち直りって、いったい何を指標にして立ち直りというの？」ということですね。それからもう１つは、非行とかかわっている少年の場合には、多くは伝統的な貧困というものを抱えていて、我々が想像するような生活を送ることができているわけではありません。このことから現実的なゴールをどこに置くんだという議論があります。そのときにいろいろ考えてみますと、収まるということかなということを仲間と話し合っているわけなんです。

社会の中に収まっていく。収まるということは、個人、本人だけではなくて、その周囲の人たちの見方、とらえ方、関係といったものを含んでいると思うんですけども、こういうものをちょっとヒントに考えまして、居場所探しというものは結局社会の中での自分の収まりどころ、こういうものを探していく、あるいはそれを見つけていく。そのプロセスとして考えることができるんじゃないかなと思います。

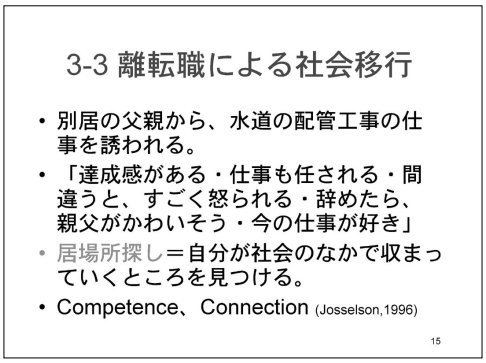
居場所といいますと、安心して自分でいられるという言葉がよく出てくるんですけども、ここではそうじゃなくて、CompetenceとConnectionという言葉を少し挙げてみました。これはJosselsonという方が述べていることで、この方はアメリカの臨床心理学の研究者なんですけども、Josselsonは1970年代の初頭にアメリカの大学生だった女性のアイデンティティの発達というものを縦断的に調べていった方です。

1990年代半ばに中年期を迎えた女性たちを調べたわけなんですけども、もともと旧来のエ

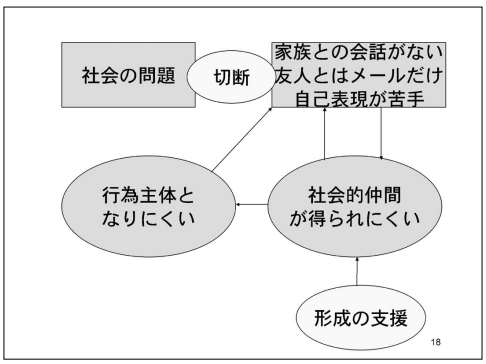
リクソンのアイデンティティ論によりますと、アイデンティティというものは男性のみに問題となるんであって、女性は内的空間というものが問題になるというふうにいわれていたわけなんですが、女性にも政治、経済、政治の領域も問題なんだと言ったんです。実際にJosselsonも含めて、当時のアメリカの学生運動の中で女性も立ち上がっていったということで、研究論文として、女性も男性も同じようにアイデンティティには直面し、また政治的な主体になり得ると。こういう問題意識でもって研究を始めたわけなんですけども、意外とその方の予想していたこととは違う結果が出てきまして、女性にとっては関係性というものが非常に重要だと、そういう結果が出てしまった。それを青年期だけではなくて、成人期、中年期と通して研究をした結果、女性のアイデンティティにとって重要なものは、１つはCompetence（有能感）であると。有能感といいますのは、自分が世界に対して影響を与えることができるという感覚のことです。それからConnection、これは結合性であるとか、つながりということなんですけども、人とのつながりが実感できる。そういうもの２つを重視しています。こうした有能感というものと、それからつながりの実感というもの、そういうもので先ほどの男子の高校生の例も考えることができるんじゃないかなというように思います。



その前に、ここでもう一度振り返って熊沢さんの出された、とりあえず性というものを考えてみたいと思います。とりあえず性というのは、青年心理学で言いますと、モラトリアム的傾向とかですね。モラトリアム的傾向というものは何かというと、いろいろあるというふうにいわれるわけなんですけども、しかしこのシンポジウムで議論されていますように、限られた可能性、この当該の高校生の持っている可能性、高校の持つ可能性であるとか、階層の持つ可能性であるとか、あるいは就職先が少ないとかといったような労働市場の問題、さまざまな問題、あるいはフリーターになることによって不安定な生活を送るといった問題があります。それが将来展望の狭まり、将来の不安、現在の集中、仮の自分といったものをつくってまいります。

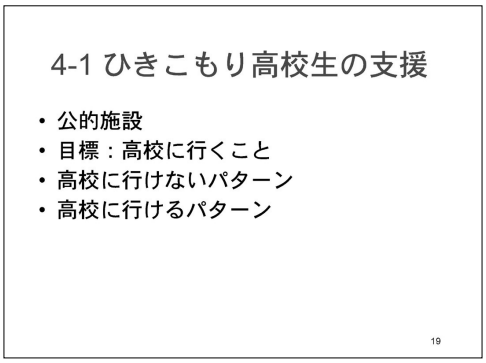


それから、私が悪いということなんですけども、個人や家族の資源の乏しさとして現れてくるわけなんですが、これが今度は個人や家族の行為のまずさとして現象してくる。その行為のまずいことによって、まずいというのはちょっと括弧付きの「まずい」ということだと思うんですけども、それがまた必ずしも資源が豊かになっていかない。その背後には大きな社会の階層の問題等々あると思うんですけども、こういったところでぐるぐる回っているように見える。家族も悪いけども、どうも本人の行動も悪いんじゃないか。それによってぐるぐる悪循環になっているように見えてしまう面があるように思います。



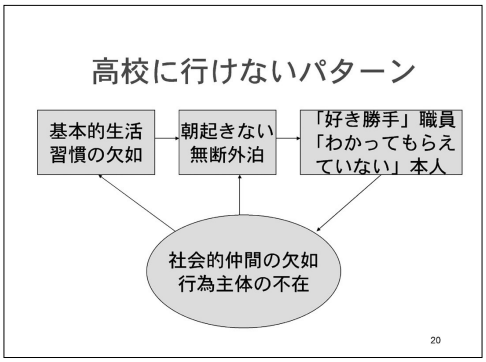
そこで、支援としては、まず社会の問題と切断していく、あるいは資源の支援のようなことが求められるかなと思います。それから、家族との会話がないとか、自己表現が苦手といった問題もあります。

こうしたものは個人の生育史というものを通して社会の問題がここに入ってくるわけなんですけども、社会的仲間が得られにくいと、また行為主体となりにくい。行為主体となりにくいので、社会的仲間が得られにくいといった悪循環が回っていく。こういう面だけ見ると、非常に個人的な問題、あるいは心理的な問題というふうに見がちなんですけども、その背後には生活史を通して、あるいはさまざまな面で社会に規定性というものがあるように思います。



さて、引きこもり高校生の支援ということで少し付け加えたんですけども、ある児童自立支援施設からお聞きしたや考えてみたことを通して考えてみたいと思います。

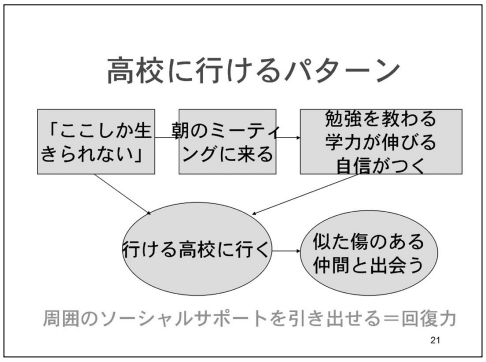
児童自立支援施設ですから 18 歳までしかいられないのと、1 年を超えてそこにいることはできないというのと、それから 40 名ほどいるわけなんですけども、合宿形式で行う以外にも通所型があるということと、それから児童相談所からの措置によって入所というタイプが決まるといった特徴があります。この施設の目標は、高校に行くこと、あるいは高校に戻ることです。



高校に行けないパターンと、行けるパターンということで 2 つ考えてみました。まず高校に行けないパターンなんですけども、基本的生活習慣が欠如している。朝起きない、朝起きられない。昼ごろ起きてくる。そして無断外泊をしたりする。先生が言うには、好き勝手なことをしているというふうに見られています。それに対して本人たちは、わかってもらえていない、こういう感情を募らせていきます。結果として、社会的仲間の欠如、行為主体の不在、それがまた朝起きない、起きられないということにつながって、ぐるぐる回っていく。そういう関係になっているのかなと、お話をうかがうとそんなふうに思います。

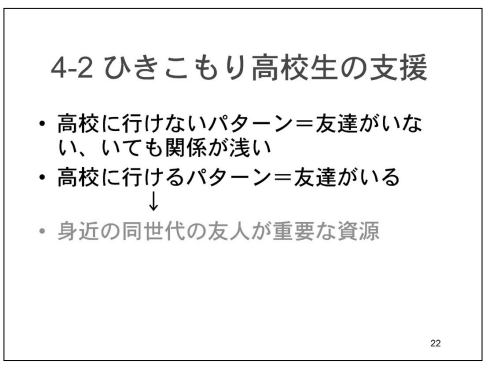
それじゃあ、どうしたら高校に行けるのかというふうに考えてみますと、基本的な生活習慣を立て直せればまた行けるのかといいますと、なかなかそれは難しいということになっていくので、結局さっきのモデルでは行き詰まってしまうわけなんですけども、それじゃあ、

行けるパターンはどういうパターンかということを聞いてみますと、こんなふうに言われます。



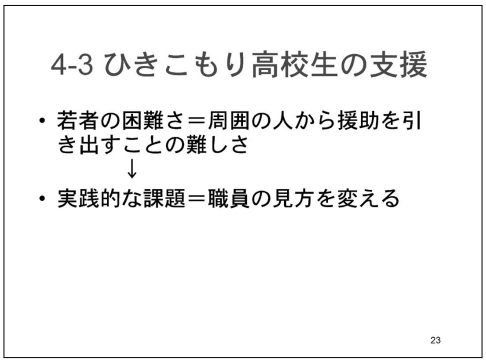
どうも、ここしか生きられない、そういう覚悟をしている高校生はいい方向に回っていくようだと言われました。朝のミーティングにも来る。そして朝のミーティングに来れば誰か職員がいていろいろな話もできるし、それから話ができるといっても非常に向こうから話し掛けてくるわけでもありませんし、話はあまり弾まないようなんですけども、先生方が勉強を教えることもできる。そうすると、ごくわずかでも学力が伸びる。学力が伸びると、ちょっと自信が付いてくる。

それからもう１つは、ここでしか生きられないということと関連するんですけど、行ける高校に行くというのもあるそうです。その行ける高校に行きますと、似た傷のある仲間たちと出会っていく。こんなふうに高校に行けるパターンの場合には関連がある。そして、周囲のソーシャルサポートを引き出すことができる、そういう生徒たちかなというふうに言われました。回復力というときに、サポートを引き出すことができる力が求められているのです。



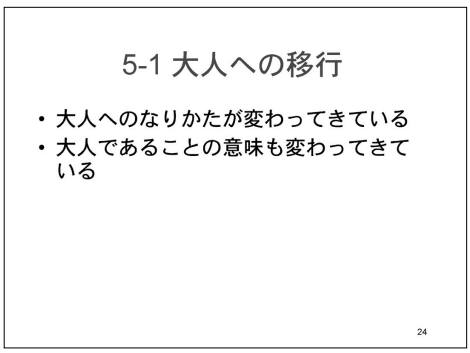
そして高校に行けないパターンと、行けるパターンとどこか違うことはありませんかということを聞きましたら、いろいろ考えた末に、どうも行けないパターンは、友達がいない、友達がいる、こういうのが大きいかなというふうに言われました。身近な同世代の友達が重要な資源になるかどうかということなんですけども、以上のことをまとめてみると、どうも高校に行けないパターンは悪循環のモデルにはまっている。そして高校に行けるパターンの方は良循環の中にあるわけなんですけども、悪循環の方は基本的生活習慣ができていない。

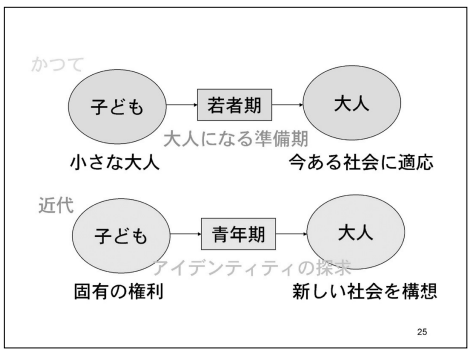
じゃあ、どうしたらいいんだろう。良循環の方は、今ここを生きる場として定めている。どうしたら生きる場として定めることができるんだろう。あるいは友達がいる、じゃあどうしたら友達が増えるんだろう。



そういうふうにまた問題がその段階で立てられていくと思うんですけども、実践の課題を探るという視点から見ると、おそらく職員の見方を変えていくことが1つは課題になるかなと思います。つまり好き勝手なことをしていると、実際に好き勝手なことをしているのかもしれませんけども、そういった好き勝手しているというふうに見ている見方をどんなふうに変えていけば、それが実践的な課題として成り立って、そして悪循環のパターンから生徒、高校生が抜け出していくことができるのか。この悪循環のサイクルから抜け出すきっかけをどこでつかむのか。そのために職員の実践的な課題としてどんなふうに高校生をとらえていくのか、若者をとらえていくのか。そういうことが課題になるかなと思います。

こういった見方を変えていくときに、後で坂元さんの方からもっと大きな見方を提案されるんじゃないかと思うんですけど、青年心理学から見た見方としてこんなふうに考えてみたいと思います。

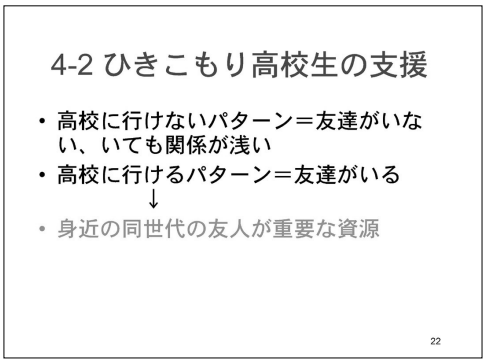




非常に図式的な言い方になるんですけども、かつては「小さな大人」としての子どもで、若者期は大人になる準備期で、そして大人は今ある社会に適応していったわけなんです。それに対して近代以降は、子どもは固有の権利を持っていて、そして大人は新しい社会を構想する。今ある社会に適応していくのではなく、新しい社会をどう若者を含めて構想していく

のか。そういうことをしていく意味でのアイデンティティの探求がある。

ここで言うアイデンティティの探求というのは自己発見なんですけども、自分を発見するということは、自分の住む世界というものを立ち上げていくわけですから、世界を立ち上げていくということがアイデンティティの探求というふうに考えてみますと、そういうことが収められる。そんなふうに若者の一見未熟と見えるようなものの中に新しい可能性を見つけていくこと、そして今の社会というものを基準にして、そこにどう若者を当てはめていくのかということではなくて、どんなふうに社会を構想していくのか。そういうことをつくっていくという２つの中に、この近代以降の見方の意義があると思います。



こんなふうに考えまして、あと１分ちょっとでまとめをして終わっていきたいと思うんですけども、アイデンティティの探求というものを社会の移行ということから考えますと、居場所というものを探していく。そういう試みですね。そして、その居場所の中にはCompetenceとConnectionというものが感じられる場所であって、さまざまな人の出会いというものによって社会に収まっていく。

そして、そのアイデンティティの探求の中には、今までの生育歴の中で、生活史の中で形成された関係性というものをくずしていく。あるいは、新しい環境をつくっていく。そういう青年期のトラブルというものを通して、人間関係のトラブルというものを通して自分なりの世界をつくっていく。そういう試みというものが含まれているんじゃないかなと思います。

そして、新しい社会を構想するというのは、居場所をどうつくっていくのかという議論とも重なっているだろうと思います。１人の人間として尊重される。１人の個人として対等に扱われる。必要なときは人に頼ることができる。あるいは人に頼られることもある。そういった関係が大人になることを促進していくんじゃないかなと思います。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（報告終了）

（付記）

「ひきこもり高校生の支援」は平山澄江氏との議論から学んだ。お礼を述べたい。